

手をつなごう2007

平成19年12月17日

岡山県立東備養護学校

支援部だよりNO. 26

第3回東備地域 支援会議開催！

今回は10月～12月の巡回相談実績について簡単な報告を行ったあと、ミニ勉強会を行いました。

専門家チーム員の吉利先生、東先生に巡回相談員の日頃の悩み、特に「保護者との連携」に焦点を当てたお話をいただきました。また安東先生にはWISC - の読み取りのポイントを教えていただきました。

保護者との連携について一部ですがお知らせします。



保護者を交えたケース会

保護者からみて、味方あるいはニュートラルな立場の参加者がいるかどうかは大切。そして次の3点を心がける

- ・事前に十分な情報を提供する。(どのような人が参加するのか・どのようなことを相談するのか・助けてくれそうな関係者がいるかどうかなど)
- ・ケース会までの時間的な猶予(保護者自身が考えを整理する時間)を確保する。
- ・ケース会に参加することによるメリットを明確に伝える。

また、学校の現状を素直に保護者に伝え、保護者から学び、共に考えていく姿勢で小規模な会議から発展させていくことも必要ではないか。

その他、ケース会における管理職の役割は非常に大きい。そのため、管理職に対しても十分な情報を提供していく必要がある。またケース会の進め方やアドバイスの仕方を研修することも必要。

保護者への言葉のかけ方

信頼関係を作る上で重要な要素になる。

「家でも〇〇させてください。」

(かえって不安をあおる)

「決まりですから できません。」

(脅しと取られる場合も)

「他の子と比べて××」「気にしすぎですよ」(保護者にとっては大きな問題)など、決めつけた言い方、子どものせいにする言い方は望ましくない。同じ意味でもプラスの表現を使うことが有効。子どもに対する気になることは、直接、個別に。

発達面で心配なことを保護者に伝えるとき

突然、障害の話を持ち出したら、混乱することが多い。障害に関する知識もなく、関心もない場合、理解することは非常に難しい。子どもの良い面を強調しつつ、気になることを付け加えていくことが有効ではないか。長期的に対応する視点が求められる。

保護者との連携

相当に難しいものと認識し、現状の冷静な情報共有と役割分担をする。情緒的な共感をしてしまうと巻き込まれて支援できにくくなる。感情的には共感し、対応については具体的・建設的に。保護者との溝を埋めることは難しいかもしれないが、こちらがいくつかのパターンで橋を架けて保護者に渡ってきてもらう。

保護者と学校の思いを一致させるには

まずは保護者の思いをしっかりと捉える。そのうえで、学校としての目標、目的との整合性を図る(学校の活動が何のためなされているのか、子どものどこを伸ばそうとしているのか伝える)。またあくまで学校は子どもの味方であることを伝え、保護者の思いや子どもの発達を支えていくサポーターであることをわかってもらう必要がある。

よく勉強をされている保護者も多いが、現実を知ってもらうためにはエピソードや成功事例など、具体的事実を示す必要がある。

